

Title	一七世紀オックスフォード大学におけるピューリタンの改革
Author(s)	佐野, 正子
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume21, 2006.3 : 59-76
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3309
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

一七世紀オックスフォード大学におけるピューリタンの改革

佐野 正子

はじめに——なぜ一七世紀イングランドか

一七世紀イングランドにおけるピューリタニズムが、近代世界の成立に重要な役割を果たしたことは、マックス・ウェーバーやエルンスト・トレルチ、A・D・リンゼイらによつて、指摘されているところである。一七世紀イングランドは、ちょうど中世から近代へと向かう過渡期に位置しており、その中で近代社会の形成原理としてはたらいだものが、ピューリタニズムである。またピューリタニズムは、近代世界の成立過程に役割を果たしたと共に、教会史的に見ると、アメリカの教会形成に大きな影響を与えてきた。わが国のプロテスタント教会の多くがアメリカを経由して伝来したものであり、その系譜を辿るならばピューリタニズムに行き着く。聖学院大学のキリスト教の伝統も、この系譜の中に位置づけられる。一七世紀ピューリタニズムを学ぶことは、全くわれわれと関係のない外国の昔の思想を学ぶというよりも、デモクラシー思想の源流やわれわれのキリスト教の伝統を知る上でも必要な、われわれに深く関わる事柄であると考える。

ピューリタニズムとは何か。イングランド国教会は、ヘンリー八世の離婚問題に端を発して、ローマ・カトリック教会から分離して生まれたが、エリザベス一世時代に、国教会はカトリックとプロテスタントの中道を行くという路線を取ることになる。しかし大陸の宗教改革の影響を受けたイングランドの聖職者らは、イングランドでは宗教改革が徹底していないという自己反省から、ピューリタン運動が始まる。ひと言でまとめるならば、イングランドの宗教改革をより徹底した形で宗教改革するという運動であると言える。

ではなぜオックスフォード大学を取り上げるか。わが国では、オックスフォード大学におけるピューリタンの改革についてほとんど知られておらず、未開拓な研究領域である。一三世紀にいくつかのコレッジが設立されてから今日に至るまでの大学の歴史の中で、ピューリタンらが大学の指導者となつて大学改革に取り組んだのは、唯一この時代だけである。彼らほどのような改革を試みたのか。一七世紀イングランドは激動の時代であつた。ジェイムズ一世が亡くなり、チャールズ一世の時代になると、専制的な支配となり、迫害されたピューリタンらはオランダやアメリカに亡命を余儀なくされる。やがて王党派と議会派の間に内戦が起こり、議会軍の勝利によつてチャールズ一世は一六四九年一月に処刑され、共和制となる。一六五〇年代にはオリヴァー・クロムウェルがプロテクターとして政治的指導者となり、ピューリタンの支配の時代が一六六〇年の王政復古まで続く。この激動の時代に、オックスフォード大学はピューリタン革命とともに歩む。チャールズ一世およびウィリアム・ロードの支配下にあつた大学を、ピューリタンのな大学に改革することは、ピューリタン指導者らに課せられた使命であつたと言える。本稿では、ピューリタンらがどのようにオックスフォード大学をピューリタンのな大学に改革したのか、その試みを見てみたい。

1. チャールズ・ロード体制下のオックスフォード大学

チャールズ一世に重んじられたウイリアム・ロードは、ピューリタンを迫害した大主教として有名である。ロードは、一五九〇年代にオックスフォード大学で学生時代を過ごし、一六一一年から二一年まで母校であるセント・ジョンズ・コレッジの学長となり、一六二九年からオックスフォード大学の総長(Chancellor)を務め、一六三三年には大主教となった。ロードの総長時代および大主教時代のオックスフォード大学では、ロードの信奉者が重んじられ、ロードの指導の下にロード的な改革が行なわれた。ロードの熱心な信奉者であり王党派であったブライアン・ドュッパが一六二九年から三八年まで、またサミュエル・フェルが一六三八年から四八年まで、副総長を務めた。ドュッパとフェルはクライスト・チャーチの学長も兼ねていた。ロードは礼拝における儀式を重んじ礼拝式文を改革して、ハイチャーチ的な礼拝様式を徹底させることに心を注いだ。礼拝堂の装飾は荘厳な儀式に合った華美なものを好み、礼拝堂の祭壇の位置を東側に移動し、祭壇の周りに柵を設け、祈祷の時に膝まずくことや祭壇における儀をすることを強要した。またすべてのフェローや学生にアカデミックガウンの着用とラテン語の公用を徹底しようとした。ロードは大学が「儀礼」を軽視している風潮を嘆き、彼が総長に就任したときに、コレッジの学長らに対して、すべての大学のメンバーはそれぞれにふさわしいガウンを着用することを徹底するように命じた手紙が残っている。このようなロードの路線はピューリタンらの目にはカトリック的で権威主義的なものと映った。

一六三〇年代のロード体制以来、大学は王党派が主流となっていたので、四〇年代に入り内戦が始まると大学当局は王党派を支持し、各コレッジは金銀の財宝を寄付して内戦に協力した。チャールズ一世はロンドンを追われ、オックスフォードを拠点として戦い、オックスフォードは一六四二年から一六四六年まで王党派の牙城となった。

内戦の間大学での教育は事実上不可能となった。^④

2. 長期議会によるピューリタンの大学改革

内戦の結果、一六四六年に議会軍はオックスフォードにおいて王党派に勝利した。議会にとつて、王党派で占拠されていたオックスフォード大学から王党派を一掃し、内戦によつて混乱と無秩序に陥つていた大学を、本来の学問の研究と教育の機関に戻すことが急務な課題となつた。そこで議会は、オックスフォード大学におけるピューリタンの改革に乗り出すことになる。

オックスフォード大学におけるピューリタンの改革は、視察委員会(The Board of Visitors)^⑤によつて始まつたと言
える。視察委員会とは、大学におけるピューリタンの改革をめざして、長期議会によつて設置された委員会である。^⑥ 長期議会は、一六四七年五月に二四名から構成される視察委員会を設置する法令を出した。^⑦ 王政復古まで
視察委員会は三回組織されたが、四〇年代後半に編成された最初の視察委員会は、大半が長老派ピューリタンであつた。^⑧ 委員会は、一六四八年から翌年にかけて、多くの王党派のコレッジの学長や教授やフェローを免職にした。
オリエル、リンカン、クイーンズ・コレッジ以外の学長はすべて免職となり、クライスト・チャーチでは、学長であつたサミュエル・フェルと共に、ジョン・ウォール以外の七人の大聖堂参事会員(Canon)^⑨が辞任に追い込まれた。
このため大学全体で約二百のフェロー職の空席ができ、多くのピューリタンが招聘された。^⑩ 招聘されたピューリタ
ンらの内訳を見ると、一六三〇年代半ばにケンブリッジ大学で学んだ若い研究者が多く含まれており、約四〇名の
ケンブリッジ大学出身者のうち、その三分の一はエマニュエル・コレッジの卒業生であつた。^⑪ 最初の視察委員会は、

一六五二年四月一三日の会合を最後に解散された¹²。長老派ピューリタンを中心としたこの最初の視察委員会が行なった改革をまとめると、ロード体制を一掃するために多くの王党派の教員を免職にして、その代わりに多くのピューリタンを教員として招き、ピューリタンの大学に編成しなおすための環境を整えるという役割を果たしたと言える。

3. クロムウエル時代のピューリタンの大学改革

一六五一年一月にペンブロック伯爵の死によってクロムウエルが大学総長に選ばれる。クロムウエルが総長に就任したことによって、クロムウエルに重んじられた独立派が大学の中で指導的立場に立つようになる。その中でも中心的な指導者として活躍したのが、大学副総長およびクライスト・チャーチの学長に抜擢されたジョン・オウエンである。大学総長であったクロムウエルが大学に送った手紙の中に、クロムウエルの大学に対する期待が述べられている。「あなたがたの間で素晴らしく育っている敬虔と学問の種や株は、偉大で輝かしい我らの主イエス・キリストの国にとって有益であるようにという私の祈りは必要なくらいである¹³」。クロムウエルは、大学で「敬虔と学問の種と株」が大きく育っていることを喜び、それがキリストの国にとつて有益であると捉えている。クロムウエルの下で副総長を務めたオウエンは、「敬虔と学問の種と株」を育てるために大学の改革に精力的に取り組んだ。

(一) クライスト・チャーチにおけるピューリタンの改革

一六四八年から一六五一年まで大学の副総長およびクライスト・チャーチの学長を務めていた長老派ピューリタンのエドワード・レイノルズ⁽¹⁾は、共和政権に忠誠を誓うエンゲイジメント⁽²⁾に署名することを拒否したために、一六五一年三月に副総長の職とクライスト・チャーチの学長を辞任し、オウエンがクライスト・チャーチの学長の職を担うことになった⁽³⁾。ヘンリー八世によつて一五四六年に設立されたクライスト・チャーチは、大聖堂を持った特異なコレッジである。初代の学長のリチャード・コックスは熱心な宗教改革の推進者であつた。コックス時代、大主教克蘭マーによつてヨーロッパ大陸から招かれた著名なプロテスタント神学者であつたピーター・マーターがクライスト・チャーチの大聖堂参事会員のひとりとなり、欽定神学教授(Regius Professor of Divinity)に任命された。このようにクライスト・チャーチは設立当初から宗教改革に積極的なコレッジであり、この伝統は長く続いた⁽⁴⁾。しかしロード時代にロードの熱心な信奉者であり王党派であつたドユツパとフェルが学長であつたため、後任のレイノルズがコレッジの学長となつた一六四八年頃には、コレッジはいまだ議会側に対して敵対的な雰囲気が残つていた⁽⁵⁾。オックスフォード大学の中心的なコレッジであるクライスト・チャーチをピューリタンのなコレッジに改革することは、レイノルズやその後を引き継いだオウエンらにとつて大きな課題であつたとと言える。

オウエンがコレッジの学長となつて間もない頃に出された大聖堂参事会(Chapter)の決議は、説教に関するものであつた。ひとつは一六五一年五月に、コレッジに属する修士以上の者は日曜日に無牧の教会の説教を担当することというものであつた⁽⁶⁾。もうひとつは一六五一年六月に、すべての学生は日曜日ごとに聞いた説教の内容を指導教員に報告することという決議であつた⁽⁷⁾。説教を報告するというこの課題は、説教を注意深く聞き理解していなければできないことである。説教を重視することはピューリタンの伝統であるが、説教に関するこの二つの決議は、オウエンが大学の教育においても、魂の養いとして説教を重要なものであると考えていることを示している。

オウエン自身も大学において多くの説教を行なっている。²⁴一六五二年から五七年まで大学教会であるセント・メアリー教会で、モードリン・コレッジの学長を務めていたトマス・グッドウィンと交互に、日曜日の午後の説教を担当した。またクライスト・チャーチの大聖堂での日曜日の礼拝の説教も定期的に行なつたと考えられる。さらに毎週木曜日の午後四時にコレッジでもたれていた大学講義を時には担当したことであろう。²⁵同時代人のアンソニー・ウッドは説教者としてのオウエンを以下のように評している。

彼の人柄は礼儀正しく好ましかった。そして彼は説教壇でとても優雅な振る舞いと雄弁な話しぶりと、人をひきつけ巧妙に説く態度を示した。彼は彼の弁舌の説得力により、またその他のいくつかの目に見える優越性によつて、彼を尊敬する聴衆をほとんど彼の望むままに動かし巧みに導くことができた。²⁶

このようにウッドはオウエンを優れた説教者として高く評価している。

また一六五一年六月二日の大聖堂参事会では、大聖堂の窓から神や天使が描かれているステンドグラスを取り外すことが決議された。²⁷これもピューリタンの改革のひとつとして挙げられるであろう。

(2) 第二視察委員会による大学改革

オウエンは一六五二年九月に、レイノルズの退任の後に一年間副総長を務めていた長老派のダニエル・グリーンウッドの後任として、大学総長であるクロムウェルより推薦され大学の評議会(Convocation)において承認されて副総長となった。一年ごとの更新である副総長の職は、それから五年間クロムウェルの推薦によつてオウエンが再

任された。

クロムウエルは、大学に宛てた一六五二年十月一六日付けの正式な書面で、総長の職務を委任するための委員を五名任命した²⁸。その書面の内容は、クロムウエルの国政の仕事が激務なためロンドンを離れることができず、総長の承認が必要な事柄を以下の五名のうち三名以上が承認した場合に、総長の承認としてみなすという権限を彼らに委任するというものであった。

私はここに、現在大学の副総長であるジョン・オウエン氏およびそのいくつかのコレッジとホールの学長たち、あるいは彼らのうち五人かそれ以上（その中の一人が前記の副総長であること）に、前記のメンバーの間にすでに生じたかこれから生じるすべての意見の相違や不満について、聴聞し吟味することを望み、委任する。その際彼らには、その件について、彼らの判断において、適切であり正義と公正に適うと彼らが考えるように命じ、決定するための、私の持つ限りの最大限の権限と権威を付与する²⁹。

その五名とは、ジョン・オウエン、ピーター・ウィルキンズ（ウォーダム・コレッジ学長）、ジョン・サン・ゴダード（マートン・コレッジ学長）、トマス・グッドウィン（モードリン・コレッジ学長）、ピーター・フレンチ（クライスト・チャーチ大聖堂参事会員）である³⁰。総長の職務を委任されたということは、当時彼らが大学内で最もクロムウエルに信頼された指導者であったことを示しているであろう。

最初の視察委員会が解散されてしまった後、オウエンやグッドウィンら大学の指導者たちは、大学の改革をさらに推進するために、大学関係者から成るより小さな組織としてあらたに視察委員会を編成することを議会に求め、

一六五二年六月一日に承認された。長期議会から派遣された委員らによって構成された第一視察委員会が、行なったことはいわば外からの改革であつたのに対して、オウエンらは大学の内部からの改革を試みたと言える。次の正式な視察委員会が設置されるまで、クロムウェルによって選ばれた大学関係者十名から成る第二視察委員会は、一六五三年六月二〇日から一六五四年九月一日まで定期的に委員会を開き、大学の改革に取り組んだ。十人の委員は、ジョン・オウエン、トマス・グッドウイン、ピーター・フレンチ、ジョンナサン・ゴダード、ジョン・コナント（エクセター・コレッジ学長）、エドモンド・スタントン（コーパス・クリステイ・コレッジ学長）、サンクフル・オウエン（セント・ジョンズ・コレッジ学長）、サミュエル・バズネット（オール・ソールズ・コレッジのフェロー）、フランシス・ホウエル（エクセター・コレッジのフェロー）であつた。彼らが当時の大学の改革を担った指導者たちである。この第二視察委員会は、副総長であつたオウエンのリーダーシップのもとに開かれ、この委員会記録を見るとオウエンらがめざした大学の改革の内容が明らかとなつてくる。

一六五三年六月二〇日から開始された第二視察委員会において大学の学生の宗教生活に関する決議がいくつもなされている。二回目の会合である六月二七日には、クライスト・チャーチのコレッジ内にあるオウエンの学長宅²³で、学期中「週に二回、月曜日と火曜日に午後一時から長くて六時まで」会合を持つことが決められた。議事録には以下のように記されている。

六月二七日 視察委員は週二回会合を持つこと

オックスフォード大学の視察委員によって以下のことが決議され規定された。視察の業務に関する会合の時間は、週二回すなわち月曜日と火曜日に午後一時から長くて六時までとし、その後は次の会合まで休会とする

こと。⁽³³⁾

週に二回、午後を丸々使って会合がもたれていたということは、オウエンらがいかにこの視察委員会によって大学の改革に取り組もうとしていたかという彼らの熱意が表れていると言えるであろう。同日の会議では、大学に所属するコレッジのすべての指導教員の氏名を各コレッジの学長が翌週の月曜日の会合までに提出することを決議した。

一六五三年六月二十七日 指導教員の名前を連絡すること

オックスフォード大学の視察委員によって以下のことが規定された。前記の大学の諸々のコレッジとホールの学長(あるいは彼らが不在の場合にはその代理)は、それぞれの団体におけるすべての指導教員の名前を……翌週月曜日午後一時に、クライスト・チャーチ内の副総長公舎での視察委員の会合へ連絡すること。⁽³⁴⁾

オウエンらは、学生を指導するすべての指導教員を視察委員会が把握しておくことが必要であると考えていたことが分かる。

そして学生の宗教生活の規律に関する決議が以下のようになされている。学生は指導教員の前で「毎週日曜日後六時から九時の間に当日出席した礼拝の説教の内容を報告することが求められる」と決められた。

六月二十七日 学士は報告を行なうこと

オックスフォード大学の視察委員によつて以下のことが規定された。大学の前記のコレッジとホールのすべて
の学士と学部生は、毎週の主の聖日に、各団体の長および管理者によつて任命された能力と敬虔において優れ
た一人または複数の者に対して、午後六時から九時の間に、彼らが聞いた説教およびその日の他の宗教的活動
への参加について報告することが要求されること。そして各団体の長および管理者は、学士以上の学位をもつ
者すべてとともに、自らその報告に同席し、祈祷やそのような会合にふさわしい他の宗教的義務が伴うよう配
慮することが望まれる。そして以下のこともさらに規定された。この規定の写しが各学長や管理者へ送付され、
各団体に公表されること。³⁵

この決議は、オウエンが一六五一年六月に、クライスト・チャーチの学長に就任した直後の大聖堂参事会の会議
で決議された内容と類似している。クライスト・チャーチでのみ行なわれていた学生に対する訓練をすべてのコ
レッジの学生に課したということを意味している。この決議はオウエンらが、学生の宗教生活において説教を真剣
に聞き理解することが学生の信仰の養いにとつて重要であると考えていることを示している。また七月四日の会合
では、「すべての指導教員」は、每晚「午後七時から十時の間の都合のよい時間に、彼らの学生らとともに学生の
部屋で祈祷の時を持つこと」が定められた。

大学における各コレッジとホールのあらゆる指導教員は、夜七時と十一時の間のある都合のよい時間に、彼ら
の学生と彼らの部屋でともに祈ること、そして機会があるときに彼らの時間を報告すること。³⁶

このように指導教員には、勉学だけではなく学生の信仰生活をも導く役割が与えられていたことが明らかとなる。一六五三年十一月一四日の会合の記録には、オウエンらがめざした大学の目的が明記されている。

大学の主な目的は、人文学だけでなく神学において人間を養成することである。その結果（神の摂理が人々を召した時）キリストの福音へと回心したことを公けにし、永遠の命へと魂を鍛えることができる。また神の事柄の訓練はその点における知識と興味を増し加える。礼拝の適任者の数が確保される限りにおいて、当大学の各コレッジでは頻繁に説教が説かれるべきであることを、視察委員らはふさわしいと考えている²⁷。

この引用に示されているように、オウエンらは大学の主な目的は人文学だけではなく神学を学ぶことであることを明確に述べ、神学を学ぶことよつて神の知識が増し加えられ、永遠の命へと魂を鍛えあげることができる²⁸と明記している。そのために各コレッジにおいて説教が多くなされることを奨励しているのである。

当時のオックスフォード大学はケンブリッジ大学と並んで聖職者養成機関の役割を果たしていた。オウエンらは、イングランドを福音的な国とするために、そして将来の教会や国を担う指導者を育てるために、大学での神学の教育と信仰の養いが重要であると考えているのである。第一視察委員会が果たした役割は大学から王党派を一掃し、多くのピューリタン教員を招いたことであつたが、第二視察委員会は、学生の霊的養いを重視し、実質的に学生の宗教生活を整える役割を果たしたと言えるであらう。

(3) クロムウェル時代のオックスフォード大学における宗教生活

大学の目的としてオウエンらによって明記されていたことが実行に移され、説教が頻繁に説かれ、キリスト教的集会や演習がさかんに持たれたことが、以下の同時代の資料からうかがえる。同時代人のウッドは、当時の大学でどのような礼拝やキリスト教的集会が持たれていたかを詳しく記している。

モードリン・コレッジでは毎週土曜日午後四時に、翌日への準備のために学長とフェローたちによって交代で説教がなされた。またその学長のグッドウインは学長宅で、独立派の集会を毎週水曜日のほぼ同じ時刻に厳粛に守るよう定めていた。^⑧……コーパス・クリステイ・コレッジでは毎週日曜日の朝八時に、学長とフェローたちによって説教がなされた。その学長であるスタントンはその学長宅で毎週木曜日の午後四時まで長老派の集会を持っていた。……セント・メアリー教会では毎週火曜日の朝七時に常に大学の数名の者たちによって説教がなされた。クライスト・チャーチでは、毎週木曜日午後四時に、その学長や大聖堂参事会員やその他の者たちによって説教がなされた。前記のコナントによって、毎週金曜日朝七時にオールハローズ教区教会で講義が行われた。午後にはニュー・イン・レインにあるロジャーズ博士宅で長老派の集会が持たれていた。^⑨

また王政復古後に非国教徒の牧師となつたジョージ・トロスも、一六五〇年代にペンブロック・コレッジの学生であつた大学生生活を振り返って、以下のように記している。

私はしばしば金曜日の午前中にはコナン博士の講義に、火曜日にはハリス博士の教理問答の講義に通つた。優

秀で威厳のある神学者であるハリス博士は、若者のための彼自身の教理問答を用いていた。また木曜日にはク
ライスト・チャーチの大聖堂参事会員の講義にも出席した。私がオックスフォードに来たときには、数多くの
説教が説かれ、そして数多くの優秀でオースドックスで実践的な神学者が説教を説いていたことを私は心から
神に感謝している。⁽⁴⁰⁾

さらに視察委員会で決議した学生の説教の復唱と夜の祈禱が実践されていたことも、トロスの記録に残されてい
る。

われわれのコレッジホールで毎週主の日の夕方夕食前に、われわれは副学長か他のフェローの前で説教や神聖
な祈禱を復唱した。この方法によつてコレッジは主の日にとてもよい秩序が保てた。それとともに夕食後すべ
てのコレッジの学生の義務を速やかに済ませ、三名か四名の有望な少年たちが私の部屋に集まり、彼らとも
に祈禱の時を持つのを常とした。⁽⁴¹⁾

またペンブロック・コレッジにおいて聖餐式は、コレッジのメンバーの中から信仰深いと認められた選ばれた者
のみに限定されて施されていたことが、トロスの以下の叙述に示されている。「彼（ラングレイ博士）はしばしば
主の晩餐をコレッジの選ばれた者に施していた。私もその中のひとりであった。またヘックマン氏からもそれを受
けた」。⁽⁴²⁾この叙述が示しているように、聖餐式が選ばれた者にのみ限定されて施されていたことはビューリタンの
である。このようにオウエンの副総長時代のオックスフォード大学は、多くの説教が説かれ、礼拝や講義や集会が

盛んに持たれていたことが同時代人の残した記録からも明らかとなる。

オウエン自身も一六五五年七月の副総長演説で、「大学が今日ほど多くの純粹で気高い魂を養ったことはかつてなかつた」と述べており、当時の大学の宗教生活について満足している様子がうかがえる。以上のように、クロムウエル時代のオックスフォード大学のピューリタンの改革の中心は、神学の学びと、説教や祈祷による魂の養いであつたとまとめることができるであらう。

まとめ

オックスフォード大学の歴史を執筆したマレットは、オウエンの副総長時代には、大学の基金は以前の十倍に増加し俸給は改善し大学の学問と教育が向上したことを挙げて、副総長として行政面でのオウエンの働きも高く評価している。オウエンら大学の指導者たちは、大学を内戦の混乱から本来の学問と教育の機関へと戻すことに尽力したと言えるであらう。一六五〇年代はオックスフォード大学の歴史の中で唯一ピューリタンらが指導者として大学の改革を行なつた時代である。特にピューリタンのな改革として挙げられるのは、学生の宗教生活に関するものである。前述したように、大学の目的は「人文学だけでなく神学において人間を養成することである」とされ、「頻繁に説教が説かれるべきである」と視察委員会記録に記されていた。実際に大学では多くの説教が説かれ、講義や集会が盛んに持たれていたことが同時代人の記録に残されている。イングランドの将来の教会や国を担う指導者を敬虔なキリスト者に育てるために、ピューリタン指導者らは大学での神学の教育と魂の養いを充実させ、学生の宗教生活を靈的に豊かなものにすることに努めたとまとめることができるであらう。

(注)

- (1) I. Roy and D. Reinhart, 'Oxford and the Civil Wars', in N. Tyacke (ed.), *History of University of Oxford*, vol. IV, Oxford, 1997, p. 687.
- (2) *Ibid.*, p. 687.
- (3) H. L. Thompson, *Christ Church*, London, 1900, p. 61.
- (4) Roy and Reinhart, *op. cit.*, p. 698.
- (5) *Register of the Visitors of the University of Oxford, from 1647 to 1658*, ed. M. Burrows, London, 1881, p. 353. 視察委員会記録の草稿はオックスフォード大学ボールドレイアン図書館に残っている。
- (6) *Register of the Visitors*, p. xi.
- (7) *Acts and Ordinances of the Interregnum, 1642-1660*, vol. I, London, 1911, pp. 925ff.
- (8) Anthony Wood, *The History and Antiquities of the University of Oxford*, vol. II, ed. J. Gutch, Oxford, 1791, p. 543.
- (9) Thompson, *op. cit.*, pp. 54ff.
- (10) B. Worden, 'Cromwellian Oxford', in N. Tyacke (ed.), *History of University of Oxford*, vol. IV, Oxford, 1997, p. 734.
- (11) *Ibid.*, p. 735.
- (12) *Register of the Visitors*, p. 353.
- (13) C. E. Mallet, *A History of the University of Oxford*, vol. II, London, 1924, p. 389.
- (14) レイノルズは、ウェストミンスター神学者会議においても活発に会議に参加したカルヴィニストであり、ピューリタンたちからの信望が厚かった。
- (15) 共和政権は、国王や貴族院なしのコモンウェルスに忠実であることを誓うエンゲイジメントに、すべての大学関係者の署名を義務つけた。Mallet, *op. cit.*, p. 386.
- (16) クロムウェル自身はレイノルズが退任しないように望んだ。Worden, *op. cit.*, p. 736.
- (17) 一六五一年三月一四日の議会で議決された。 *The Journals of the House of Commons*, 14 March 1650/1.

- (18) 大聖堂参事会員は八人から成っている。
- (19) Thompson, *op. cit.*, pp. 1-68.
- (20) Thompson, *op. cit.*, pp. 54-55.
- (21) P. Toon, *God's Statesman*, Exeter, 1971, pp. 57f. Chapter Bookの手稿をクライスト・チャーチに保存されている。
- (22) Toon, *op. cit.*, p. 58.
- (23) K. Hylson-Smith, *The Churches in England from Elizabeth I to Elizabeth II*, vol. I, London, 1996, p. 197.
- (24) オウエンが大学で行なった説教をまとめた『On the Mortification of Sin (1656)』と『Of the Nature and Power of Temptation (1658)』をオックスフォードから出版している。
- (25) Wood, *op. cit.*, p. 645.
- (26) Wood, *op. cit.*, p. 97. ウッズは当時の大学の出来事を細かく書き残して貴重な資料を提供しているが、ピューリタ人たちを偏見の目で見ていたウッズのピューリタンに対する評価は概して厳しい。その中でオウエンを名説教家として高く評価していることは注目に値する。
- (27) Toon, *op. cit.*, p. 57.
- (28) *The Correspondence of John Owen*, ed. P. Toon, 1970, pp. 52f.
- (29) *Ibid.*, p. 53.
- (30) *Ibid.*, p. 53.
- (31) *Register of the Visitors*, pp. 356ff.
- (32) チャールズがオックスフォードを国王派の牙城にしていた時に滞在していたのも、クライスト・チャーチの学長宅であった。Thomason, *op. cit.*, p. 56.
- (33) *Register of the Visitors*, pp. 357-8.
- (34) *Ibid.*, p. 357.
- (35) *Ibid.*, p. 358.
- (36) *Ibid.*, p. 359.

- (37) *Ibid.*, p. 372.
- (38) グッドウインの独立派の集會に集まつてゐた會員は、Thankful Owen, Francis Howell, Theophilus Gale, Stephen Charnock, Samuel Blower, Edward Terry などがいた。*The Works of Thomas Goodwin*, ed. J. C. Miller, vol. II, Edinburgh, 1861, p. xxxiv.
- (39) Wood, *op. cit.*, pp. 645f.
- (40) George Trosse, *The Life of the Reverend Mr. George Trosse*, ed. J. Hallet, London, 1714, p. 81.
- (41) *Ibid.*, p. 81.
- (42) *Ibid.*, p. 81.
- (43) Owen, *Oxford Orations*, p. 24.
- (44) Mallet, *op. cit.*, pp. 395f.

(二〇〇五年五月二五日、「キリスト教と諸学の会」)